
3人のこれから

眠人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

3人のこれから

【Nコード】

N3409B

【作者名】

眠人

【あらすじ】

10代の終わりに夫を亡くした主人公と、亡き夫の兄弟たちの物語。喪失感の中、新たに生まれた関係性。3人の「これから」はどんなのだ？

1；新しい仕事

19歳の春、私は夫を亡くした。死ぬと分かっていた、それでも愛さずにはいられない人だった。

よく晴れた、気持ちのいい日に、彼は旅立った。

あれから2年。私はまだ、彼の家に住んでいた。

もともと、身よりがなく、一人で生活していた私を、彼が招き入れてくれた家だった。彼の家族は新しい、いい人が見つかるまで、住まうことを希望してくれたのだった。

彼の家族は、4人と私。仲の良い両親と、仲の良い男兄弟二人。父の晴彦。母の都。高校生の翔太。小学生の朗。亡くなった彼の名は草太。

私の、大好きな家族。時々、胸を痛くさせるほど、愛しい人たち。

「美晴、いる？」

翔太が帰るなり、すぐに私の部屋へ来た。学生服の翔太は、出会ったばかりの頃の彼を思いださせて、いつもまぶしい。

「なあに？」

「これ、見てみて」

そう言って差し出したのは一枚の紙きれだった。

「求人？」

そこには、アルバイトの求人広告が載っていた。

私は、彼を亡くしてからはずっと定職につくわけでもなく、しかしある程度の収入は切らさないように、働いていた。最近、長く続

けていたコンビニのアルバイトをやめたばかりで、新しい仕事を探していたのだった。

「古道具屋さん？」

「そう。たぶん、美晴にはこういう普通じゃない仕事のほうが似合うと思うんだよね」

翔太はさらりと言ったが、すこしチクリとささる。

「あ、ごめん。でも、そう思うから。もし気が向いたら、行ってみなよ」

翔太はそれだけ行っ、すぐばたばたと階下へ降りて行ってしまった。

翔太の言うことは本場で、私はどのごく一般的な仕事も似つかわしくなく、借りてきたコンパニオンのようになってしまった。コンビニの仕事は気に入っていた。夜のコンビニは変なお客が多いから、楽しかった。

古道具屋、という響きに妙に惹かれた私は、明日、いってみようと早速決めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3409b/>

3人のこれから

2011年1月26日13時45分発行